

資料 5

水中遺跡調査関連機関

国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）

【設立】1971年認可法人海洋科学技術センター（JAMSTEC）として設立、2004年独立行政法人海洋研究開発機構として再発足、2015年国立研究開発法人海洋研究開発機構に名称変更。

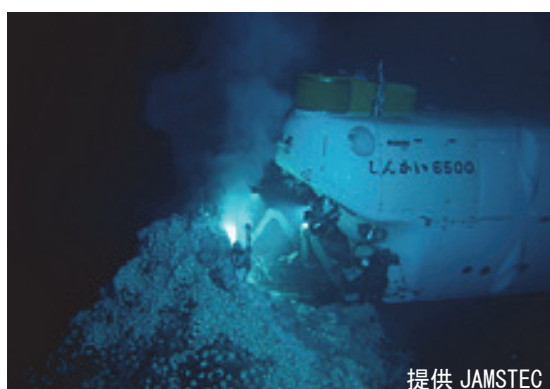
【場所】本部は神奈川県横須賀市、研究施設は青森県むつ市、高知県南国市、沖縄県名護市

【設立趣旨】平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究への協力等の業務を総合的に行うことにより、海洋科学技術の水準の向上を図ると共に、学術の発展に資することを目的とする。

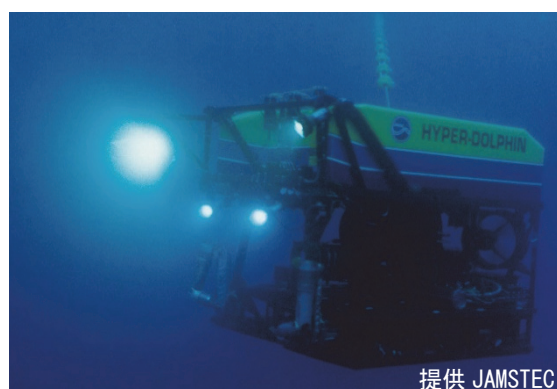
【活動内容】JAMSTECは、海洋科学の総合的な研究機関であり、研究遂行に必要な探査技術の開発も行っている。従来からその調査対象は主に深海域であり、浅海域の遺跡調査等は対象にしていない。深海探査のための技術開発は、1973年頃から始まった1978年に米国の技術を導入し、我が国初の曳航式のソナーやTVカメラを開発、実海域における実験を行い、自前で探査技術を獲得していった。その後、有人潜水船「しんかい2000」や「しんかい6500」の開発、最新観測器機を搭載した多くの観測船や無人探査機（ROV）等を導入し、探査能力を高めていった。海中落下物体の探査は、1995年に墜落した海上自衛隊のヘリコプターの探査の成功から始まった。1997年には、流出原油が社会問題となったロシア船籍タンカー「ナホトカ」の探査を行い水深2,500mで船体を発見し、原油流出が止まっていることが確認した。その後、戦時中に沈没した船舶や海難事故によって沈没した複数の船舶の捜索にも成功している。1999年には打ち上げに失敗したHⅡロケット8号機メインエンジンの探索を実施し、広大な調査海域において3,500mの海底で発見・回収し、故障原因を追及することができた。その後も高度な探査技術を使って多くの深海底調査を行ってきたが、特に2011年に発生した東日本大震災の震源域の緊急調査（2011年～2012年）では、膨大な研究者と船舶、有人・無人探査機が投入された。地震前の同海域におけるデータとの比較研究の結果、震源域付近の海底は50mも動いており、巨大な海底の地滑りが起きていることがわかった。また、過去に撮影した画像と比べると多数の新しい断層がみられ、海底の様子が全く変わってしまっていることも確認された。

今後は、これらの高度な探査技術を浅海域の海底遺跡調査に活用することが期待されている。

（海洋研究開発機構 土屋利雄）



有人潜水調査船「しんかい6500」



無人探査機（ROV）「ハイパードルフィン」

NPO法人アジア水中考古学研究所（ARIUA）

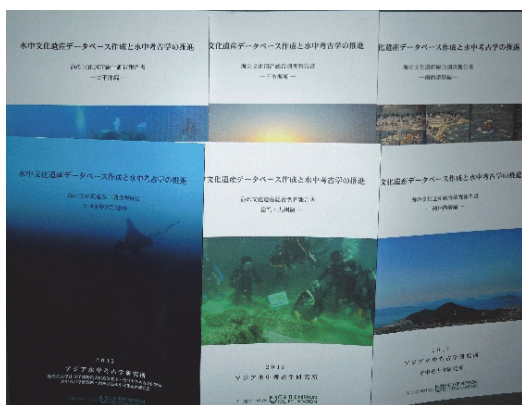
【設立】 特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所は、1986年12月に設立した任意団体、「九州・沖縄水中考古学協会」（英文略称 KOSUWA）を母体として2005年5月に改組し、英文名を Asian Research Institute of Underwater Archaeology（略称を ARIUA）とした。

【場所】 本部は福岡県福岡市とし、ARIUA 東日本会員連絡会を国立大学法人東京海洋大学海洋人類学教室に設けている。

【設立趣旨】 この法人は、水中考古学により海、河川、湖沼に存在する遺物、遺構及び遺跡を総合的に調査し、わが国の水中考古学の発展と共にその普及に寄与することを目的とし、この目的を達成するために次の事業を行う。1) 水中を中心とした考古学に関する情報収集及び学術調査事業、2) 水中を中心とした考古学に関する成果や活動等を発表する機関紙・ニュースレターの発行及び関連出版物の発行・インターネット等による情報提供事業、3) 水中を中心とした考古学に関するシンポジウム、講演会、研究発表会、講習会等の開催事業、4) 水中を中心とした考古学に関する国内外の関係機関との協力・交流事業、以上の事業を設立目的に沿った活動とする。

【活動内容】 1989年～2004年に鷹島海底遺跡における緊急発掘調査や学術調査及び神埼地区の詳細分布調査に関わり、床浪地区で縄文時代早期の包含層を確認。1994～1995年と2001～2002年の神埼地区の調査で蒙古襲来における元軍船の椀や「てつはう」を含む船材、武器、武具、陶磁器等3,000点以上の遺物を取り上げている。法人となったARIUAは五島列島小値賀島で2011年までに山見沖海底遺跡や前方湾海底遺跡調査を行い、東南アジア系陶器類や鉛のインゴットを確認、前方湾及び周辺海域では碇石や11世紀後半以降の中国陶磁器を確認している。2007年には「海底遺跡ミュージアム」構想を日本財団助成事業で実施した。2009～2011年には同財団の助成を受け「水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進」事業を実施し、全国水中遺跡地図を含む「海の文化遺産総合調査報告書」を刊行した。2013～2015年には鷹島海底遺跡床浪地区で詳細分布調査を実施した。2015～2017年には熱海市初島沖で江戸元禄期の徳川幕府三つ葉葵の瓦を積んだ沈船の調査を東京海洋大学と協同で実施している。「水中考古学研究」誌や「Newsletter」の発行、日韓・日尹学術及び国内シンポジウムや展示会等も開催している。

（アジア水中考古学研究所 林田憲三）



海の文化遺産総合調査報告書



熱海市初島沖海底遺跡調査

NPO法人水中考古学研究所

【設立】 特定非営利活動法人水中考古学研究所は、1988年4月に設立した任意団体「水中考古学研究所」を母体として、2007年9月に現在の組織となった。

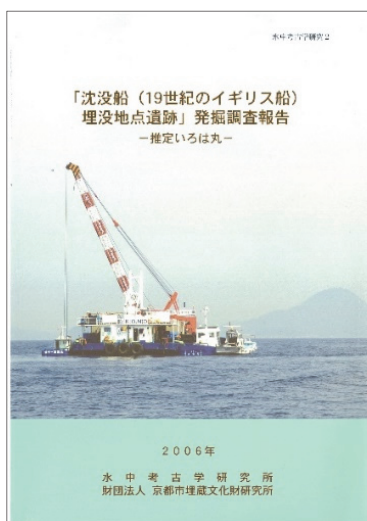
【場所】 事務所は滋賀県守山市に所在する。

【設立趣旨】 考古学のうち、水中考古学を主とし、それに関する発掘調査及び研究に関する事業を行い、我が国の考古学の発展並びに文化財の保護とその普及に寄与することを目的とする。

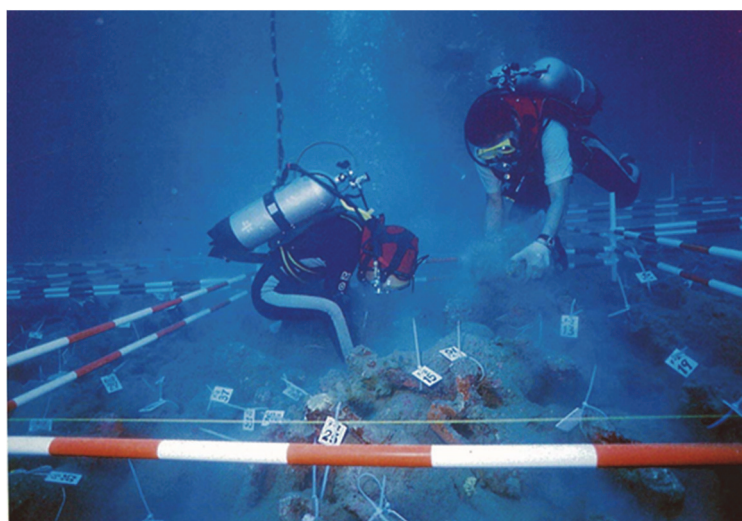
【活動内容】 水中考古学研究所の設立は1988年4月であるが、その契機は1980年に文化庁が粟津湖底遺跡の発掘調査（遺跡確認法の調査研究－水中遺跡の調査－）を財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、それに際して設立された調査団が母体となる。団長は田辺昭三氏であり、その後、琵琶湖総合開発計画に伴う事前調査としての分布調査や試掘調査、シリア沖古代遺跡発掘運営委員会が実施した3次に及ぶシリア沖沈没船調査への参加等を行った。

研究所の設立後は、1988年からは広島県福山市宇治島沖の「沈没船（19世紀のイギリス船）埋没地点遺跡－推定いろは丸－」の調査を実施した。1989年には、中国歴史博物館水下考古研究室と南海1号沈没船の共同調査に関する意向書と協議書を交わして、1990年には「中国南海沈船学術調査委員会」を北京で開催した。このほかにも、1991年には「シリア沖沈没船発掘調査・中間報告書」を刊行し、1993年には朝日新聞社が主催した中国南海沈船文物を中心とする「はるかなる陶磁の海路（みち）」展の特別協力として中国歴史博物館との展示品の借用に関する調整を行い、東京都では朝日新聞社小ホール、愛知県では名古屋市立博物館、広島県では福山市の広島県立歴史博物館で展覧会を開催し、水中考古学の意義とその成果についての普及に努めた。

このほかにも、浜名湖弁天島海底遺跡（静岡県浜松市）、函石海岸（京都府久美浜町）、西城川小割鉄水没地点（広島県三次市）、水の子岩海底遺跡（香川県小豆島町）、鷹島海底遺跡床浪地区（長崎県松浦市）等の調査を主体的あるいは支援的に行った。また、1993年以来、『水中考古学ニュース』を発行し研究所の活動、国内外の水中考古学に関する最新情報を発信している。



発掘調査報告書表紙



シリア沖古代船発掘調査風景（提供：水中考古学研究所）



韓国国立海洋文化財研究所
(外観、左下は子供向け体験館のエントランス)



韓国国立海洋文化財研究所
(達理島沈没船の展示)